子どもと築く、未来のしくみ

Plan
プラン・ジャパン

Girl's Project
プラン一般プロジェクト
緊急・復興支援
報告書

Autumn 2015

2014年7月 ⟶ 2015年6月

発行：公益財団法人 プラン・ジャパン

Girl's Project

ガールパワー炸裂！
みんなで一緒に夢をかなえよう

2014 年 7 月からスタートし、中間点を過ぎたところのニカラグアのプロジェクト。
現地を訪れた寺田職員が、プロジェクトの進捗状況とビジネスを始めた女の子のグループの様子をレポートします。

女の子自身がグループをつくり、ビジネスプランを考え、起業する

寺田聡子職員（プログラム部）

このプロジェクトは、大きく分けて２つの目的があります。1つめは、リスクの高い仕事に従事している女の子が安全な仕事に就くことで、身の安全を確保しながら生計手段も確保すること。２つめは女の子自身、その家族、地域の人々が「女の子の力と価値」に気がつき、女の子の力を最大限に発揮できるようにすることです。

対象を２つのグループに分け、今期は主に 10 コミュニティの 85 人の女の子を対象としました。女の子たちは２～４人ぐらいのビジネスグループを 22 組作り、若年層の起業や職業訓練を専門とする地元 NGO のトレーニングを受けました。自分の地域で何が一番喜ばれるか、何が最も必要とされているのかを考え、それぞれがビジネスプランを作り、全員で展示会をして、お互いの計画について学び合いました。完成した計画については「資本金」が渡され、実際にスタート。軌道にのるまで、毎週プランとパートナー NGO が仕入れや売上げなどの細かい管理についても確認し、修正や改善を加えました。

また、ジェンダーに基づく暴力や若者の問題に取り組む地元 NGO と協力しながら、男女の力関係が不均衡であること、自尊感情のもち方、ジェンダーに基づく女性のあるべき姿への思いこみが社会に存在すること、性暴力からの自己防衛の方法などを学ぶ活動にも取り組んでいます。従属的な存在にならないように母親などにうまく自分を理解してもらう方法や、「NO」という意思表示の伝え方など家族とのコミュニケーションも学びます。

男性との話し合いの様子

また、女の子の家族やパートナーに対しては、女の子の過重な家事労働の問題や思春期の女の子に必要な配慮、さらには男性優位思想（マチスモ）へ疑いの目を向ける必要性などが話し合われました。

女の子が起業するにあたっては、家族（この地域のほとんどは母子家庭なので、特に母親）の理解がとても大切です。現実的に、女の子の家事労働の負担が軽減されないと、新しい仕事や学校などで、かえって女の子の負担が増える可能性があるからです。母親たちは「自分の子どもたちがあんな風に活き活きとがんばっているので驚いた」「娘の商売を手伝いたい」と喜んでいます。女の子たちのボーイフレンドやパートナーがお店の宣伝に奔走しているケースもあります。

ビジネス展示会に出席した寺田職員（写真中央）

ニカラグア「女の子の起業支援プロジェクト」

実施地域 ● サンラファエル・デル・スール市内の14村
実施期間 ● 2014年7月～ 2016年6月
対象 ● 14歳から18歳の女の子、約150人

背景

首都マナグアに近い太平洋側の海辺の町サン・ラファエル・デル・スール市には、週末に多くの観光客が集まります。そこでは女の子たちが貝殻アクセサリーや魚、雑貨を売り歩いて家計を助けていますが、売上げはわずかなうえに、海岸や路上での物売りは暴力や性暴力の危険にさらされます。買春といった性産業の存在もわかっています。

今期の主な活動

- 女の子のトレーニング（85人）
- 女の子のビジネス立ち上げ支援（22グループ、85人）
- 女の子の家庭への戸別訪問（48世帯）
- 親や保護者のトレーニング（130人）
- 男性へのジェンダートレーニング（24人）
- 行政担当者とのネットワーク作り

ビジネス展示会：雑貨店を営むグループのブース

「私は一人じゃない」女の子同士が集まって生まれる力

このプロジェクトの対象の女の子たちは、幼いときから一人で物売りをして家族の生計を助けてきました。怖くて心細い思いも、痛いほどしてきたはずです。

今は、口を揃えて「前の仕事は怖かったけど今は友だちと一緒だから怖くない」と言います。インフォーマルセクターで新しい商売を始めること、若年層の女の子であることを考えると、誰かにお金を取られたり、嫌がらせを受けたりといったリスクは依然として皆無とはいえません。しかし女の子たちはもはや一人ぼっちではありません。信頼する友だちとグループになることで、お互いの身を危険から守り、知恵やアイディアを何倍にも膨らませ、商売を成功させることで、どんどん自信をつけていくのです。

女の子たちのグループには以前からの仲良しもいれば、活動のなかで出会った新しい友だちもいます。「商売は一人でやったほうが利益を独り占めできる」という意見もありましたが、今は仲間と一緒にいることの安心感、チームワークや協力することの意義を感じています。それぞれに家族の事情も異なり、大きな悩みを抱えている子もいますが、グループのみんなが支えているのです。

これからも困難は待ち受けているかもしれませんが、「私は一人じゃない」という安心感と仲間を頼りに、それぞれが将来の計画を着実に実現していきます。

グループ紹介 | 1　レストラン経営（4 人グループ）

リンダ（スペイン語で“美しい”）とフローレス（スペイン語で“花”）というメンバーの名前から、お店の名前は「美しい花」。経営モットーは「私たちの料理はあなたのために！」。レストランの主なメニューは、魚と揚げバナナのセット（約 120 円）です。

もともと料理が得意な４人組。この地域にレストランが１つもなく、「みんなが喜ぶだろうな」という思いから起業しました。平日の午後は学校に通い、週末のみの営業ですが、多いときは地域の人が 30 人から 40 人来店します。

グループ紹介 | 2　美容院（3 人グループ）

お店の名前は「ファッション・ルビー・ユニセックス」。経営モットーは「あなたの内面の美しさのために！」。施術価格は未定。

もともとは知り合いではなかった３人組ですが、オリエンテーションで知り合って意気投合、地域になかった美容院を思いつき、施術するための技術訓練を受けました。「日本からの支援のおかげで、前に進んでいくことができます。前よりもずっと安全で保護されていると感じられるようになりました」

ネパール「女の子の早すぎる結婚防止プロジェクト」

実施地域 ● ラウタハット郡とバンケ郡の 20 コミュニティ
実施期間 ● 2014 年 7 月～ 2016 年 6 月
対象 ● 子どもや若者 2,500 人と地域住民約 3,500 人

早すぎる結婚に反対し、行進をする子どもたち

子どもが中心となって大人とともに地域の慣習を見直す

背景

インドとの国境近くに位置するネパールのラウタハット郡とバンケ郡は、先住民族や最下層のカーストの人々が多く住む地域です。伝統的な慣習が残り、早すぎる結婚をさせられる女の子が多くいます。結婚した女の子は家事労働に追われ、学校に通うことが難しくなり、経済的・社会的に自立することができません。早すぎる出産による死亡や性感染症の危険にもさらされています。

ミシンを支給された女の子たち

今期の主な活動

- 意識啓発活動に参加した地域の人々（のべ約 7,000 人）
- 非公式教育や学用品支給を通じた教育支援（のべ 230 人）
- 「子どもクラブ」トレーニング（357 人）
- 既婚の女の子たちへの収入向上支援と家族カウンセリング（のべ 27 人）

今期は３つのグループを対象に活動を行いました。１つめは早すぎる結婚のリスクが最も高い年齢の女の子たち。２つめは親や地域の人々と行政です。この２つのグループには、早すぎる結婚をなくすための意識啓発やトレーニングを中心に行いました。３つめはすでに結婚した女の子とその夫、家族に対する働きかけです。

１つめのグループでは、学校に行っていない女の子を対象に、小学校に再入学できるように非公式教育の機会を提供。経済的に最も厳しい子どもたちには学用品を支給するなどの後押しをしました。２つめのグループでは、「子どもクラブ」や地域の「子ども保護委員会」が活躍。男の子も参加する「子どもクラブ」は、学校での話し合いや路上での演劇、弁論大会など様々な活動を通じて、子どもや大人たちにわかりやすく説明を重ねました。３つめのグループの、すでに結婚した女の子たちには、性と生殖に関する健康についてのトレーニングを実施。夫や家族とのカウンセリング、収入向上の手段としてのミシンの支給などを通じて、家族も参加しながら女の子たちが抱える現在の問題を考え、解決を試みました。

Case Study ｜ ラバクシュさん（16 歳、子どもクラブ会長）

男の子も参加する「早すぎる結婚防止活動」

ラバクシュさんは、現在高校１年生の男の子です。「子どもクラブ」の会長として、早すぎる結婚がもたらす弊害を地域の人々に訴える活動のリーダーを務め、活躍しています。こうしたなかで、ある日、ラバクシュさん自身が両親に結婚を決められてしまいました。彼は活動を通じて、早すぎる結婚が幼い妻にどんな弊害をもたらすか、十分理解していました。また、経済的にも苦しい家庭環境のため、もし結婚をしたら、彼自身も学校を中途退学して働く必要が出てきます。

ラバクシュさんは両親を説得し、結婚を取りやめることができました。これからも地域の子どもクラブの会長として、早すぎる結婚が当たり前の地域で、当事者自身が声をあげやすい環境、さらにその声が尊重される環境づくりを目標に活動を続けていきます。

地域の子どもクラブの会長のラバクシュさん

リベリア「女の子の教育への理解促進プロジェクト」

実施地域 ● ロファ郡の 20 コミュニティ
実施期間 ● 2014 年 7 月～ 2016 年 6 月
対象 ● 小学校と中学校の 20 校の在学中の女の子や地域に暮らす若年層の女の子約 2,000 人

プロジェクトの説明会について知らせる女の子たち

男女ともに地域全体で後押しする女の子の教育

背景

プロジェクトを実施する地域の女の子の就学率は、小学校は 91%と比較的高いものの、中学校 28%、高校 8%と低くなるため、高学年の女の子の就学率向上の取り組みが必要です。2013 年のプランの調査によると、学校での女子トイレなどの施設の不足、女の子への性暴力、性産業への従事などの問題が浮きぼりになりました。

子どもによる啓発グループには男の子と女の子が一緒に参加

今期の主な活動

- 地域へのオリエンテーション
- 大人による啓発グループの結成（100 人）
- 地域における子どもによる啓発グループの結成（100 人）
- 子どもたちへの指導的役割を担う“メンター・グループ”の結成（80 人）
- 女子生徒への生理用ナプキンの購入（7,056 個）

2014 年、リベリアでは、エボラ出血熱の感染者が１万人を超え、約 4,800 人[※1]が命を落とすなど国全体に大きな打撃を与えました。このプロジェクトは同年７月から開始予定でしたが、一旦活動を中止。このプロジェクトの担当者として採用された専任スタッフも、エボラ出血熱への対応に奔走しました。

事態が落ち着いた 2015 年３月頃から準備を開始し、まずは、国レベルで「ジェンダー・開発省」と本プロジェクトに関する覚書を交わしました。５月のエボラ出血熱終息宣言をうけてからは、コミュニティでプロジェクトを周知するためのワークショップやパレードなどを実施しました。さらに、地域で意識啓発活動を主導する３つのグループ（大人による啓発グループ、子どもによる啓発グループ、子どもたちへの指導的役割を担う“メンター・グループ”）のメンバーを選びました。女子更衣室やトイレの建設・修繕に向けての準備、生理用ナプキンの配布も進行中です。

Voice ｜ ローズさん、コワーさん、ガルミさん

女の子だけでなく男の子も啓発活動に参加

「女の子の教育を促進するこのプロジェクトの話を聞いたとき、私も啓発グループの一員になって、意識啓発活動に協力しようと思いました。私の同級生でも早すぎる結婚のために中途退学した人が３人います。私は啓発グループの一員としてトレーニングを受けて、女の子たちが勉強を続けられるように、地域の人たちにわかりやすく説明して歩きたい。もし女の子がより良い教育を受ければ、国の発展にとっても良いことだと思います」ローズさん（23 歳、高校３年生、子どもによる啓発グループのメンバー）

「私たちの社会では、長年にわたって女の子と女性が厳しい立場に置かれてきたと言わざるを得ません。私自身がその証人です。私の父は一夫多妻で、娘が 11 人いました。学校に行かせてもらえたのは１人で、残りの姉妹たちは教育を受けず貧しい暮らしをしています。こうした自分自身の経験からも、このプロジェクトの成功に熱意をもって取り組んでいます」サミュエル・コワーさん（プロジェクト担当スタッフ）

「このプロジェクトの素晴らしい点は、女の子と女性だけではなく、男の子と男性が一緒に啓発活動に参加していることです。私は自分の経験上、女の子が教育を受けることの利点をよく理解しています。このため、後押しをしたいと思うのです。日本の支援者の皆さんからの支援に心から感謝しています」ルオプ・ガルミさん（ジェンダー専門スタッフ）

ジェンダー専門スタッフのルオプ・ガルミさん

※１エボラ出血熱のデータ出典：http://apps.who.int/ebola/current-situation/ebola-situation-report-2-september-2015

ミャンマー「安全な水を確保するプロジェクト」

実施地域 ● マンダレー地域ニャンウー郡ピャーポン村
実施期間 ● 2014年7月～ 2015年6月
対象 ● 135世帯650人（男性307人、女性343人）

一年中水がある生活へ。大人も子どもも一緒に行う水と衛生の環境改善

完成した給水塔

背景

ピャーポン村では、雨水がたまってできた池や衛生的に問題のある蓋のない浅井戸で飲み水を含む生活に必要な水をまかないますが、乾季には数キロも離れた隣村の井戸まで水を汲みに行かなくてはなりません。また、水汲みを担う女性や子どもたちは何度も往復しながら重い水を運ぶことに多くの時間を毎日費やさなくてはなりませんでした。

学校で行われている衛生に関する啓発活動

今期の主な活動

- 村落衛生委員会の設置とメンバーへのトレーニングの実施（9 人）
- 衛生習慣改善のための地域ボランティアへのトレーニングの実施（11 人 ）
- 学校での衛生活動の実施　●地域ボランティアによる啓発活動
- 衛生啓発ポスターの制作と配布
- 給水システム（井戸の掘削、貯水槽、貯水塔、発電機室）一式の設置

村全体の衛生環境改善に向けた啓発活動や深井戸給水システムの運営及び維持管理の責任を担う、村落衛生委員会を設置。選ばれた 9 人のメンバーは、衛生知識や深井戸給水システムの維持管理について十分なトレーニングを受けました。

また、新たに選んだ 11 人の地域ボランティアが、1 人につき 11 ～ 12 世帯を担当し、村落衛生委員会と協力しながら村人全員に啓発活動を実施。現在多くの村人が屋外で排泄したり、ルールもない状態でゴミを処理しているため、正しい衛生行動や習慣を啓発するポスターをすべての世帯へ配布しました。学校では子どもたちが活躍。すべての学年の代表 24 人で構成される学校衛生改善チームが立ち上がり、手洗い習慣を含めた正しい衛生行動を習得し、同級生に指導しました。

プロジェクト開始後に井戸の掘削地が変更になるなどの問題が発生しましたが、新しい掘削地を決めた後は順調に工事が進行しました。

Case Study ｜ キンサンミンさん（村の女性）

水汲みの負担が減り、教育資金のために働くことができます

キンサンミンさんは、上の娘が他の村の高校に通っており、学費をまかなうために夫とともに一生懸命働いています。キンサンミンさんは教育を受けていませんが、子どもたちには十分な教育を受けさせたいと考えています。けれども、水汲みのために毎日 4 時間とられてしまい、日雇いの仕事に支障が出ていました。

今回、村に新しい給水システムができたことで、水汲み労働から解放され、もっと仕事ができるようになりました。各世帯あたり 1 万 8,000 ミャンマーチャット（日本円で約 1,700 円）を拠出しましたが、次のように話してくれました。「私たちは裕福ではありませんが、一年中安全な水が使えるのは何物にも代えがたいことです。水汲みの労力と時間を省くことができます。その代わり、娘たちに教育を与えるために、一生懸命働きます。このプロジェクトをご支援くださった皆さまに幸福が訪れるようにお祈りします」

キンサンミンさん（左）

ベトナム「少数民族地域における教育改善プロジェクト」

実施地域 ● ハザン省、クアンビン省、クアンガイ省
実施期間 ● 2015年1月～ 2015年12月（予定）
対象 ● 小学校児童約7,000人と教師約600人

日本人専門家とともに、すべての子どもが参加する授業をつくる

クアンガイ省に建設された小学校の落成式

背景

ベトナムの都市部と農村部の格差は年々広がり、中でも少数民族が多く住む山岳地域は国の発展から取り残されつつあります。教室が不足し、教育の質も低いままで、学校を卒業しても十分な知識を身につけることができません。公用語のベトナム語を話せないまま大きくなると、就業の機会も限られてしまいます。

休み時間に絵本を読む、モン族の女の子たち

今期の主な活動

- 授業の質を改善するための教師トレーニング（615 人）
- 小学校の教室建設および学校トイレの設置（3 校）
- 学校図書の支給（110 校）　●地域の読み聞かせ会の開催（1,800 人）
- プロジェクト評価および成果発表ワークショップ（3 地域）

3 年間のプロジェクトの最終年となる 2015 年。日本人専門家による「教師間の学び合い」に関する教師トレーニングを 2 回実施し、他地域の実践から学ぶスタディツアーも行いました。対象各校ではペア学習やグループ活動も増え、児童参加型の授業が実現しつつあります。また、「教師間の学び合い」の効果を認めたベトナム政府は、この取り組みを全国に展開するべくすべての小学校に指示書を出し、全国で取り組みが始まっています。

子どもにやさしい教育環境づくりに向けて、小学校 3 校の教室とトイレが完成。木やトタン板でつくられた電気もない教室で学んでいた子どもたち約 190 人が、安心して学校に通えるようになりました。昨年に引き続き、対象地域のすべての学校には学校図書を支給。休み時間に書棚に殺到する子どもたちの姿が見られるようになりました。2015 年後半には、プロジェクト評価の調査と成果発表ワークショップの開催を予定しています。

※本プロジェクトは、外務省（NGO 連携無償資金協力）と協働し、実施しています。

Voice ｜ 佐藤雅彰氏、トゥアン先生

教師間の学び合いが進んでいます

「教師トレーニングを実施したハザン省の小学校では、机の配置をグループ形式・コの字型にするなど、昨年からは想像できないほどの改善が見られました。ペア学習が文化になりつつあり、子どもたちが伸び伸びしていました。教師も立ち振る舞いが昨年とまったく違い、管理中心の指導から『見守る』姿勢へと変わりつつあります。今の 1 年生が 5 年生になる頃には、きっといい学びができるようになっているでしょう」（佐藤雅彰氏　元・小中学校長、教育専門家）

「私たちの学校では、月 1 回のペースで授業観察を通した教師間の学び合いを実践しています。教師トレーニングへの参加を通して、教師の考え方や態度が向上し、子ども一人ひとりの学びに注目するようになりました。教師間の意見交換も活発になり、建設的な意見が増えました。グループ活動はすべての子どもに学ぶ機会が与えられる一方で、一生懸命に取り組む児童とそうでない児童ができてしまうこともあり、難しい点も多いです。他校の教師たちと協力しあい、引き続き教育の質の向上に取り組んでいきます」（トゥアン先生　ハザン省タニウ小学校副校長）

教師トレーニングの一環で授業観察を行う佐藤雅彰氏（中央右）

シエラレオネ「母子が安心して迎える出産プロジェクト」

実施地域 ● モヤンバ県バグルワ首長区、ティムダレ首長区、カールグボロ首長区
実施期間 ● 2014年7月～ 2016年3月（予定）
対象 ● 妊産婦を含む出産適齢期の女性約9,300人と5歳未満児約7,000人

建設業者から工事の進捗について説明を受けるプラン職員

エボラ出血熱を乗り越えて、地域が熱望する産科病棟の建設へ

背景

センベフン村落診療所は３つの首長区の住民が利用できる唯一の保健医療施設ですが、現在、妊産婦健診用の部屋、分娩室、診察室などがありません。村々から遠く、患者の輸送手段がないため、緊急時の対応も困難です。さらに２次医療を提供できる県病院はセンベフン村落診療所から100km離れています。

地域の人々にプロジェクトの説明をするモヤンバ県の保健担当職員

今期の主な活動

●緊急産科医療棟の建設着工（1棟）　●県保健担当者、首長、議会議員、母親グループ代表などのプロジェクト関係者へのオリエンテーション（133人）

2014年、シエラレオネではエボラ出血熱の流行により、約4,000人 が命を落とし、未だ完全な終息には至らず、国全体に大きな打撃を与えています。このプロジェクトは当初、同年７月から開始を予定していましたが、その後エボラ出血熱がこの地域でも流行し、人の移動や集会などが禁止になりました。エボラ対応が優先されたため、一旦活動を中止せざるを得ませんでした。しかし、保健医療サービス改善という最も重要な課題に取り組むプロジェクトであることから、徐々に可能な範囲で準備が始まり、2015年４月から活動を再開することができました。

初めに緊急産科医療棟の建設工事を開始。地域の人々が地元で入手可能な建設資材を提供し、地元の若者が労働力を提供するなど積極的に協力しました。また首長区のリーダーや母親グループ代表など地域の人々に、プロジェクトの重要性や実施方法などを説明しました。2016年３月までに緊急産科医療棟の完成、発電用のソーラーパネルの設置や救急車輌１台の支給、携帯電話による緊急時の連絡搬送システムの構築を予定しています。

Voice ｜ アスマさん、マミエさん、ジョンソンさん

母親が待ち望む施設が、地域の力で実現に向かっています

出産を控えたアスマさん（18歳）は、「このプロジェクトのおかげで、救急車輌がもらえることが特に嬉しいです。今は約13km離れた村で暮らしていますが、産前健診のために１日がかりで歩いて来ています。このあたりの唯一の交通機関はバイクタクシーで、私の村では、先日出産のためにバイクタクシーで移動した女性が死産しました。このようなことがなくなることを願っています」

マミエさん（37歳）は、出産したばかりです。「この子は４人目ですが、私は２人目の子どもを１歳になる前に亡くしました。この地域の大勢の女性たちと同じように、緊急産科医療棟を心待ちにしています。今の診療所には部屋がないので、出産した翌日には退院しなくてはなりません。出産後すぐに長い距離を歩くので、身体に負担がかかり、それが原因で亡くなる女性もいるのです。新しい施設ができることにとても感謝しています」

プランのモヤンバ現地事務所長のモーゼス・ジョンソンさんは、プロジェクトの進捗をこう語ります。「各首長区のリーダーたちは幼い子どもと母親の健康を守るというこのプロジェクトの重要性をよく理解してくれました。その結果、多くの協力を得て、予定よりも短期間で工事を終える可能性がでてきました。プランは地域の人々の目で問題を捉えてプロジェクトを実施することを最も大切にしていますが、このプロジェクトは私たちの理想を具現化するようなものになると思います」

出産後のマミエさんと赤ちゃん

エチオピア「栄養改善と食糧確保プロジェクト」

実施地域 ● エチオピア、アムハラ州テレメット郡22村
実施期間 ● 2014年7月～ 2015年6月
対象 ● のべ約5,000世帯

魚の調理法のトレーニング

「年間3カ月しか生き延びられない村」から「みんなが生きられる村」へ

背景

テレメット郡では、雨水で育つ農作物の収穫は年に一度だけ。自力で生計を立てられるのは１年のうち３カ月のみで、残り９カ月間は緊急食糧支援に頼っています。これまでプランは緊急食糧支援を行ってきましたが、支援がなくても食糧が確保できるように必要な物資の支給やトレーニングを始めました。

青々と育った、とうもろこし畑

今期の主な活動

●野菜の種子と果物の苗の支給　（のべ1,626世帯）　●農業器具の支給（50世帯）
●川で漁をするための“さし網”など必要な器具の提供（のべ3,000世帯）
●農業スキルや栄養知識、料理トレーニングなど（のべ471世帯）
●女性の水売りの労働を軽減するためのロバ（36頭）

外部からの支援に頼らず、食糧を自分たちで確保できるようにするため、２つの活動に注力しました。１つめは生活の糧を自力で確保する手段の提供。農業のための穀物や野菜の種子や肥料、さらには魚を獲るための道具を支給しました。２つめは技術の習得。作物の効果的な育て方や、確実に魚を獲るためのノウハウを学び、伝えました。種子をもらった人々は作付けを開始、この結果、収穫を得ることができて、以前よりも食事が取れるようになったり、余剰分を市場で売ることで、貯蓄ができたりする人々も出てきました。また、この地域でもっとも貧しい女性が従事している「水売り」の仕事軽減のため、ロバを支給。女性や家族の生活を改善することができました。この地域の農業はこれからも厳しい天候に左右されますが、地域の人々は被害を減らすための農業スキルや栄養に関する知識を得たことで、こうした厳しい環境に打ち勝つための自信をもちました。

Case Study ｜ アレム・テファラさん（女性、46歳）

ロバを使うことで水の売り上げが増加。蓄えもできました

この地域で土地を持つことのできない最貧層の人々を象徴する存在が「水売りの女性」です。慢性的な栄養不足や劣悪な衛生状態のため、盲目になってしまった女性が少なくありません。彼女たちは谷間の川から水をタンクに汲み、紐で体に巻きつけて街場まで運び売っています。肩や背中の肉は水の重さのために裂けてしまっていますが、こうした労働もほとんどお金にはなりません。アレムさんは一人で子どもたちを育てながら、水売りをして生計を立てています。目が見えないため、娘が母親の仕事を手伝っています。そのため娘は不定期にしか学校に行けず、そのことを気に病んでいました。

今回、このプロジェクトでロバと水タンクを受け取り、ロバの背に乗せて水タンクを運ぶことができるので、以前より多く売ることができ、売上げが増えました。このため、毎日水を売りに行く必要もなくなり、わずかながら蓄えもできました。「何より嬉しいのは、娘が以前よりも学校に行けるようになったこと」と、アレムさん。現在、もらったロバを大切にしながら、必要なものを買い足し、さらに家の隣に小さな小屋を建てて、他人に貸して、賃貸料を得ることができるようになりました。「このプロジェクトとプランに心から感謝しています」

アルムさんと支給されたロバ

ネパール「大地震 緊急支援」

実施地域 ● シンドゥルパルチョーク郡、ドラカ郡、マクワンプール郡、シンズリ郡など11郡の116村

壊れた学校から本を見つけ出した少年

地震発生直後から、そのときどきにもっとも必要な支援を届ける

背景

2015 年 4 月 25 日、ネパールの首都カトマンズの北西約 80㎞を震源とするマグニチュード 7.8 の大規模地震が発生。死者 8,898 人、負傷者は 2 万 2,000 人以上という大災害となりました。建物被害も大きく、全壊家屋 60 万戸超、大きな被害を受けた教室も 3 万超と、多くの子どもたちが家や学ぶ場所を失いました。

仮設教室の様子。簡易なつくりですが、雨風を十分にしのげ、勉強に集中できる環境

今期の主な活動

●仮設住宅（シェルター）キットの提供（ビニールシート 4 万 6,121 枚、毛布 8,440 枚、トタン板 1,325 枚など）　●仮設診療所用のテント（42セット）、出産介助セット（1,000 セット）、産後キット（518 セット）などの提供　●食糧の提供（3 万 2,652 セット）
●水の浄化剤（4 万 2,650 錠）、安全な水キット（3 万 509 セット）の提供
●生理用品キット（2 万 2,255 セット、約 1 万 2,000 人分）の提供
●「仮設教室」の開設（166 カ所）　●「子どもにやさしいスペース」開設（62 カ所）

地震発生直後から、プランは現地政府や国連、ネパール国内外の団体と協力し、迅速かつ大規模な支援活動を開始。最も深刻な被害を受けたシンドゥルパルチョーク郡、ドラカ郡を中心に、地震発生から3カ月で 19 万 6,000 人（うち子どもは 8 万 2,000 人）の被災者へ支援を行いました。地震発生直後は水や食糧、ビニールシート配布といった「生き延びる」ための支援を行い、並行して子どもたちの保護や心のケア、水や衛生、学校再開、保健といった活動へと支援範囲を広げました。

全壊ないし深刻な被害を受けた教室は 3 万以上。プランは 166 の仮設教室を設置・運営し黒板や机といった備品、学習教材や遊具などを提供しました。「子どもにやさしいスペース」は 62 カ所に設置・運営し、のべ 1 万 2,376 人の子どもたちが遊んだり、適切な心のケアを受けたりしました。今後は「Build back better（より良い復興を目指して）」という考え方のもと活動を継続していきます。

Case Study ｜ カイリーさん（女性、70 歳）

学校の再開は希望と復興のシンボルに

シンドゥルパルチョーク郡は、地震の被害がもっとも大きかった郡の 1 つで、郡内にある 9 割以上の住宅が被災し、546 校の学校がその影響をうけました。カトマンズから 3 時間ほど行った山の上にあるシンドゥルパルチョーク郡ボットシップ村に住む 70 歳のカイリーさんは、「私の家は全壊です。余震も続いているし、今後の人生がどうなるかも分からない」と嘆いていました。

プランは水や食糧の提供といった支援にとどまらず、村内での学校再開支援にも早い時期から取り組みました。子どもたちが再び学校に通い始める姿を見た大人たちは、「これから復興が始まる」「日常が戻ってくる」と感じることができます。カイリーさんは「孫のために授業料も払ったし、制服も買った。けれども地震がすべてダメにしてしまった。学校も壊れてしまいました。でも子どもたちが学び、通える学校が新しくできたらそれは本当に素晴らしい」と最後に語ってくれました。再開された学校に通う子どもたちの姿は、地震で多くを失った人々に将来への希望をもたらしてくれました。

カイリーさん

西アフリカ３カ国「エボラ出血熱　緊急支援」

実施地域 ● ギニア（首都コナクリ、北部ディンギラエ県など計17県）、シエラレオネ（西部地域など計5地区）、リベリア（ニンバ郡など計6郡）

エボラ出血熱から回復したという証明書を受け取り、笑顔を見せる兄弟

意識啓発による感染拡大防止と子どもの保護に注力

背景

2013 年末にギニアで発生したエボラ出血熱は、西アフリカにおいて過去最大規模で蔓延。特に、ギニアと国境を接するシエラレオネとリベリアで甚大な被害をもたらしました。2015 年 5 月時点で、3 カ国合計で 2 万 7,000 人以上が感染し、1 万 1,000 人以上が亡くなりました（※）。

※ WHO

プランが設置した手洗い場で手を洗う子どもたち

今期の主な活動

●医療支援、および医療従事者へのトレーニング（1,409 人）
●コミュニティやポスター、ラジオ等を通じた意識啓発
●水衛生環境の改善と手洗い場の設置（2,299 カ所）
●衛生キットの支給（53 万 1,266 キット）　●子ども保護センターの設置（6 カ所）
●子ども保護委員会の設立（147 委員会）　●心のケアの提供（3 万 5,612 人）
●教育と教科書・学用品の支給（3,016 人）　●予防啓発トレーニング（教師 1,514 人、生徒 252 人）

エボラ出血熱の感染拡大防止と被災者支援のため、医療従事者への支援や地域住民への意識啓発のほか、水衛生環境の改善、子どもたちの保護と心のケア、教育などの活動を行いました。エボラ出血熱は致死率が高いため、人々の間で恐怖が広がり、感染者や家族への偏見・差別が増大しました。そこでラジオやポスターなどを通じて正しい予防知識を発信し、信頼関係を回復させました。また、地域住民からなる子ども保護委員会を設立。家族を亡くした子どもの保護や心のケア、里親探しを行いました。学校関係者へのトレーニング、教科書･学用品の支給も行い、学校の再開に尽力。多くの子どもたちが教室に戻ることができました。

南太平洋地域「サイクロン〝パム〟緊急支援」

実施地域 ● キリバス（アベマーマ島、オノトア島）、ツバル（ナヌメア島と、ヌカラエラエ、ヌクフェタウ等の島々）

農機具を受け取ったキリバスの小規模農家の家族

支援が集まりにくい南太平洋の国々に、復興のための物資を届ける

背景

2015 年 3 月中旬に南太平洋で発生した巨大サイクロン“パム”は、バヌアツ、ツバル、キリバス等の島々に大きな被害をもたらしました。同地域は地球温暖化などによる気候変動で海面上昇の影響を受けており、風雨による家屋被害だけでなく、高潮による水源汚染や耕地の塩害被害も深刻でした。

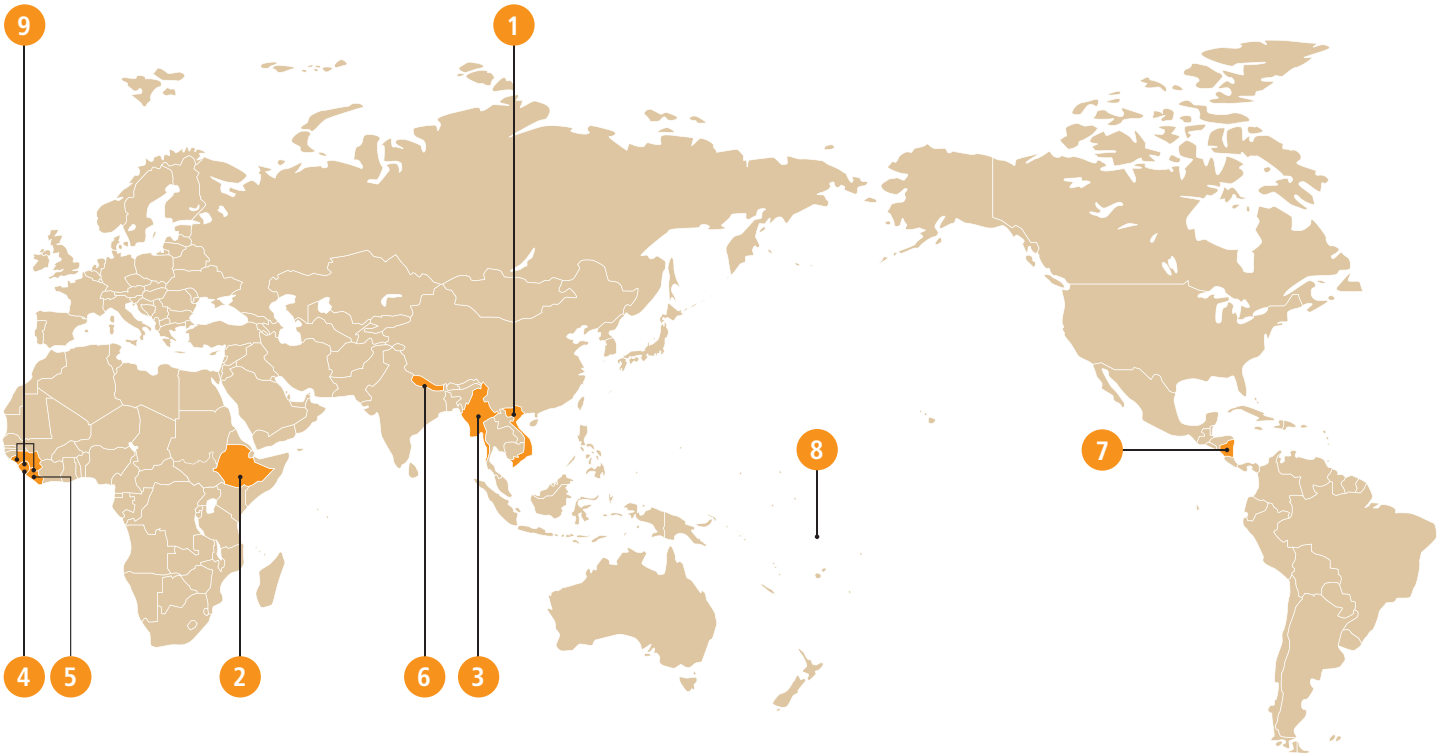
今期の主な活動

● 小規模農家に対する種子や農具の配布（キリバス 320 世帯、ツバル 250 世帯）
● 水浄化設備の修繕および衛生啓発活動　● 災害被害軽減に向けたマングローブ植林

プランは、多くの援助団体による支援が集中したバヌアツではなく、支援が集まらなかったツバルとキリバスで支援活動を行いました。災害直後に行った水浄化キットなどの物資配布に加え、高潮被害を受けた農家には種子や農機具を支給。被害を軽減するためのマングローブ植林を行いました。

2015年度
プラン一般プロジェクト、緊急・復興支援収支

（2014年7月～2015年6月）
都度寄付件数：17,070件、
Girls project継続支援者5,805人



（単位：円）

収入	寄付金等（収入合計）			282,002,332 ※1
	カテゴリー	国	プロジェクト名	
支出	一般プロジェクト	1 ベトナム	少数民族地域における教育改善	7,582,428
		2 エチオピア	栄養改善と食糧確保	12,548,200
		3 ミャンマー	安全な水を確保する	11,545,305
		4 シエラレオネ	母子が安心して迎える出産	15,106,500
		5 リベリア	女の子の教育への理解促進	14,197,456
		6 ネパール	女の子の早すぎる結婚防止	24,401,288
		7 ニカラグア	女の子の起業支援	41,417,174
	緊急・復興支援	8 ツバル、キリバス	南太平洋サイクロンパム　緊急支援	4,824,000
		6 ネパール	ネパール大地震　緊急支援	42,665,481
		9 アフリカ３カ国 ギニア／シエラレオネ／リベリア	エボラ出血熱　緊急支援	15,095,577
	公的・民間助成機関との共同事業			25,064,470 ※2
	日本国内活動費用			96,364,045
	支出合計			310,811,924

当期収支差額	–28,809,592
前期繰越収支差額	53,428,840
次期繰越収支差額	24,619,248

※1　収入には、寄付金の他、メモリアル・ファンド利息収益、遺贈信託財産取崩収入が含まれます
※2　外務省、世界保健機構、米州開発銀行などが含まれます

ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100　FAX 03-5481-6200　www.plan-japan.org

Plan プラン・ジャパン